〈文化学会総会講演会〉

近代日本版画の潮流と渡辺版画店

渡邊章一郎

渡邊章一郎氏　略歴

一九五八年東京銀座に生まれる。江戸時代以来の浮世絵の伝統を受け継ぐ木版画版元の老舗、明治四二年に祖父渡邊庄三郎が創設した渡邊木版美術画舗の三代目社長、代表取締役。渡邊木版美術画舗は、川瀬巴水など大正以来の新版画と呼ばれる近代木版画の版元として世界的な名声を担い、現在もなお多くの新しい版画の製作、刊行を続けている。国際浮世絵学会常任理事、テレビ東京「開運なんでも鑑定団」鑑定士としても活躍。

今日は沢山の浮世絵、新版画や創作版画の名品をご覧いただきながら「近代日本版画の潮流と渡辺版画店」と非常にカッコよすぎるような名前の話をさせていただきます。今日お話しさせていただきます中でキーワードがいくつかございます。新版画という言葉、それから創作版画という言葉です。この二つがしょっちゅうでてきます。皆さん江戸時代の北斎や広重に代表される浮世絵というのはご存じだと思いますが、これは基本的に絵描きと言うのは写楽でも歌麿でも下絵を描くだけなんです。それを専門の職人である彫師が版木を彫り、出来上がった版木をもとに絵描きと刷り師あるいは版元も含めてああでもないこうでもないと言いながら作品を仕上げていく。これが伝統的な木版のやり方で浮世絵スタイルと言うんですが、これを引き継いで大正期から同じ伝統的浮世絵手法で作りました版画のことを新版画と呼んでおります。

一方、創作版画という言葉がありますが、これは明治の

末頃に外国の版画が入ってくるわけですね。これには下絵を描く、版木を彫る、刷りを仕上げることまですべて自分で仕上げる。作家が自分で仕上げてこそ芸術なんだという考え方が入ってくるわけです。その考えを木版画に持ち込んで明治の末に自画自刻するという運動がおこりましたのを創作版画と呼んでおります。すなわち伝統的に職人さんとコラボレーションとしてやるのが新版画でございまして全部自分の手でやるのが創作版画。この二つのキーワードが何度も出てまいりますので、どうかご理解いただきたいと思います。

江戸文化の華、日本美術の代表とまで今日たたえられている浮世絵ですが、明治時代も後半になりますと浮世絵の衰退は著しいものになりまして日清日露戦争の報道用作品を最後として自然消滅の道を辿っていきました。浮世絵は速報性では新聞にかないません。写実性は写真にもかないません。何よりも浮世絵を志そうという絵描きさんそのものが激減しておりました。これは文明開化以降の日本の教育や世間の風潮が西洋文明への一辺倒の賛美、国内の特に江戸文化への不当な蔑視からくるものでした。一方幕末以来、浮世絵の国外流失は日本が年々国際的な地位を高めるにしたがって一層拍車がかかるようになり、皮肉にも浮世絵の国外での人気は高まるばかりでございました。これはご存じのように、お手元のリストの喜多川歌麿の「ビードロ」でございます。寛政年間の一つの名作でございます。続いて東洲斎写楽の「大谷鬼次の奴江戸兵衛」、最も有名な写楽の作品でございます。葛飾北斎「富嶽三十六景　凱風快晴」、通称赤富士といわれておりますね。歌川広重「東海道五十三次　日本橋」。揚州周延「墨田堤の雪景」。このころはまだよろしいんですが、だんだん日清日露戦争の後にはですね、山本昇雲「いま姿　寒牡丹」。浮世絵が消滅寸前のころの作品ですね。もちろんここに出しておりますのはいい作品ですからそんなにひどくないなと思うんですが、説明的な絵と言うかですね、もう雑誌の中の挿絵のような状態になって、そういうところにしか浮世絵版画は残るしかなったようです。これはもう大正期に入って鏑木清方「浜町河川の秋」。もうほとんど日本画と言うかですね、美人画ではあるんですけれども形骸化してしまっているといういうか浮世絵のみずみずしさがなくなってしまっているような感じがします。

ご縁がありまして、貿易商、小林文七商店の横浜支店に勤務し、美術品特に浮世絵の輸出に携わっていた私の祖父渡辺庄三郎は考えました。このままでは日本が世界に誇る美術品浮世絵は国内から姿を消してしまう。世界でこれだけ愛好されているのに、国内では欧米の新しい美術品や新

技術ばかりがもてはやされ、浮世絵がこれ以上発展する様子はない。幸いまだ浮世絵の技術を継承していた江戸時代以来の刷り、彫りの職人が数多く存在しておりまして浮世絵の復刻盤を制作することは可能でした。海外での浮世絵の需要は増えるばかりであっても必ずしも全ての人がいわゆるオリジナル作品、本物ばかりを求めているわけではない。オリジナルと全く同じ過程で制作した復刻版でも復刻版だと断った上で売れるはずだと考えたわけです。そこで浮世絵の復刻技術を独力でマスターした祖父は小林文七商店から独立した明治三九年より、おもに外国取引を目的に名作浮世絵の復刻版を次々と制作していきました。さらに祖父は一歩踏み出して同じく主に輸出用として短冊形で浮世絵風の版画を生み出しました。これを実験的に夏の軽井沢で同業のお店に委託販売したところ外国人向けに大いに売れて手ごたえを掴んだといいます。これがその作品ですが高橋松亭「あやせ川の雪」。

この短冊形と言うのはですね、大錦、いわゆる浮世絵の標準的なサイズを二枚

渡辺庄三郎21歳頃（明治38年）

とるところ三枚とれるわけですね。普通浮世絵は、紙をすきますと大錦盤が二枚とれるんですが、このサイズですと三枚とれる非常に合理的なサイズ。それからこういう細長盤、もちろん縦もあるんですがタテやヨコのサイズというのが外国に非常に少なくて、浮世絵独特のサイズだったらしくて非常に珍重されたようでございます。そういった経済的な理由と好みの問題で初期の渡辺版画店の新作版画にはこういう短冊型というか、三切判というこのサイズのものがよく出てきます。これが同じ高橋松亭の「源喜橋の夕照」です。先ほどの作品もそうなんですが浮世絵のいいとこどりをして、おそらく高橋松亭っていう作家にですね、こんな感じで描いてくれませんか、浮世絵のこういうところが外国人にうけるので外国に売るためにこういう風に描いてくれませんかと頼んで、ああいいよって描いてくれたのがこういう作品なんですね。これは非常によく売れて長らく渡辺版画店の主力商品、まあ浮世絵の復刻版も含めてですけど、資金源となっていたようです。

　これが高橋松亭の昭和初期の作品ですが、この奥にこの藁ぶき屋根の家の下に高橋松亭が版画をこう作っている、ほんのちょっと見えるかなと思うんですけど、これが自分の家だよと言っているわけですね。これ大田区なんですけど、いくらなんでも昭和の初期にですね、こんな田舎じゃ

ないんです。ところがなぜこういうことをやるかというと、結局外国人が日本に対して憧れっていうか理想の日本を求めるとこういう絵になるわけです。我々がフランスっていうとヴェルサイユ宮殿だとかナポレオンっていうのをイメージする。アメリカっていうとカウボーイをイメージするのと同じように、日本と言うとヨーロッパ、アメリカの人はこういうようなイメージを持っていたんではないか。従って日本国内ではこんなのは日本じゃない。もっといくらなんでも近代的国家ですよということであんまり評判が良くなかったようです。

それから花鳥画も人気がありました。私カラスは大嫌いでございまして、銀座に子供の時からおりますが、ごみは食い散らかすは、人間は突くは、迷惑千万なんですが、外国へ行きますとこのカラスと言うのは非常に利口な鳥だと、非常に頭がいいということで大変人気があるんですね。この作品はいまだに人気がありましてカラスのどこがいいと思うんですけど非常によく売れますね。日本と向こうで好みが違うということなのかもしれません。これら浮世絵風の新作版画には高橋松亭、伊藤総山、小原祥邨、楢崎栄昭など日本画浮世絵系統の絵師が起用され外国人好みの花鳥風月、風景画が江戸情緒豊かに描かれております。明治末から大正昭和期にかけて大いに売り出され、創業まもない渡辺版画店の主力商品となっていました。浮世絵復刻版や浮世絵の新作版画の成功に自信を得た祖父は、これに満足することなくさらなるものを目指しました。歌麿、北斎、写楽、広重など浮世絵黄金時代を今日の画家によって今日の感覚で再現したい。しかも伝統的な浮世絵版画の技法をもって制作をしていきたい。さらに浮世絵時代にはそれほど意識をされていなかった芸術性をもった作品を作っていきたい。このように考えたようです。

ご存じのように浮世絵版画は絵師と彫り師と刷り師の三者による共同作業で制作されていました。しかし明治に入りますと彫り刷りの技術は最高のレベルに達していながら、絵師の個性が発揮されている、これという作品が少なくなっていき、明治後半には優れた少数の例外を除けば浮世絵版画は工芸的要素が強調された作品ばかりが目立つようになりました。一方創作版画は山本鼎、恩地孝四郎ら洋画家を中心として明治末より進められてきました。

山本鼎「漁夫」。これは木版画なんですが全部自分の手で彫って自分で刷りあげた作品です。記念碑的な作品です。一枚絵として売り出されたのではなくて雑誌の中の一ページとして存在しております。基本的に江戸時代の浮世絵と言うのは出版産業でございまして、ビジネスなんですね。芸術を作ろうなんてあんまり考えてなくて、いかに売れる

ものを作ろうかと考えたわけです。結果的に売れる作品、ヒットした作品が芸術性が高かったと思うんですが、それと全く考え方が逆です。この創作版画の方たちは芸術作品を作りたい、自分の何かこう作りたいものを作ろうとしたときに、油絵でも日本画でもなく結果的に版画で作った方が自分でやりたいことができるということで版画で芸術作品を作ろうとした。ですから売ろうということを考えてないわけですね。ここのところが根本的に浮世絵と違うところで、売ろうと思っている浮世絵新版画と、自分の作りたい作品を作ろうと思っていた創作版画ですから、お互いに考え方が全く違うんですね。この辺同じ版画ですから同じようにお考えになる方が多いのですが、この二つの流れを理解して頂かないとよくわからないことが出てくるので、これも覚えていただけるとありがたいです。

この創作版画は版画制作では表現したいものは、まず自分で描き自分で版画を彫りそして自分でこれを刷りあげなければならないというものでした。すなわち自身の芸術表現は決して他人の手を借りず、自画、自刻、自刷りとも呼ばれるように制作過程すべてを自身で一貫して行うことで芸術上の自我の確立というものを求めようとしたものでした。

これは戸張孤雁（左）「千住大橋」（右）「麻の葉」という作品です。この戸張孤雁と言うのは錦絵と近代版画を繋ぐ人とも呼ばれておりまして、アメリカで洋画を学んで彫刻もいたしました。『創作版画と版画の作り方』という本も書いておりますが自画、自刻、自刷りとか先鋭的な造形に必ずしも固執せずこだわらず、どちらかというと洋風の錦絵を追求したように思える作品です。次に恩地孝四郎「水浴」という作品です。恩地孝四郎は日本の版画界の最前線で長らく活躍した方で、版の前衛詩人とも呼ばれております。カンディンスキーなどの影響もあって抽象画の先駆けのような作品を作っております。これも水浴ですけど抽象画に近いような作品ですね。創作版画の方たちは自分たちの作品を刀の画と書いて刀画あるいは版画と呼び浮世絵版画の錦絵と区別をしようと考えていきました。今日われわれは浮世絵版画と当たり前のように呼んでいるんですが、そのころまでは単に錦絵と呼ばれており、版画と言う言葉が一般的に定着したのは創作版画の出てきたこのころだと聞いております。

祖父庄三郎は後世新版画と言われる創作版画に強く影響されて、大いに刺激を受けているようでございます。新版画は浮世絵版画の伝統的な技術すなわち彫り師、刷り師の木版画における分業制なればこその高度なテクニックを有効に生かしながら画家の個性や意志を尊重し、最大限効果

的に芸術を追及しようというものでした。これにはいろいろ試行錯誤があったのですが、今日確かな作品として残っておりますのが大正四（一九一五）年のオーストリア人フリッツ・カペラリーの作品「雨中女学生の帰路の図」です。北斎漫画に似たような構図が出てくるのですが、それを見せて何となくインスピレーションをえて描いたものかと思われますが、面白いですね、日本の開国も外国から無理やり脅されて開国しましたし、例えば日産自動車が潰れかかるとカルロス・ゴーンと言うのがきて立て直したり、サッカーが弱いと見るや外国人の監督を連れてきて強くしたりとか。この新版画でもそうでございまして、国内のいろいろな方にこういうコンセプトでやってみませんかと話してもなかなかのってくれなかったらしいんですね。たまたま水彩画の展覧会を東京で開いたこのフリッツ・カペラリーが私の祖父と会いまして、彼らは浮世絵が好きですから浮世絵の話をして意気投合して、だったら自分で作ってみませんかという話になって、よしやってみようということで、日本の筆を買い与えて書いてもらって出来上がったのがこの作品です。この新版画も外国人によって道が開かれたという非常に面白い経緯がございます。

このフリッツ・カペラリーは一四、一五点の作品を残しましたが、もうほとんど実験的に風景画も描いておりますし、人物画も描いておりますし花鳥画も描いております。役者絵こそないんですけれども大首絵の美人画も描いております。こういった作品をもって、いろいろな所へまわって、外国人でさえこのような作品ができるんだから、日本の我々ができないわけないじゃないですかって言って口説いて回って作りましたのが、橋口五葉の作品でございます。「浴場の女」。橋口五葉は四一歳の若さで亡くなってしまいましたが、いちばん最初の作品は渡辺版画店で作りました。その後自分で工房を作って自分で刷り師、彫り師を雇いながら作っていたようです。

渡辺庄三郎は最初、黒田清輝という油絵の画家がいるんですがここを訪ねて行ったようなんです。自分は理解はするんですが別に特にやりたくないのだけど、浮世絵に興味を持ってる親戚がいるからご紹介しましょうと言って橋口五葉をご紹介していただいて、こういった作品が生まれたようでございます。その後から数多くの画家が依頼に応じて作品を制作していくようになりました。ついでに申し上げますと橋口五葉は自分の工房を作りまして作り上げた作品、これが「化粧の女」。そして「髪梳ける女」。この作品は切手にもなりましたのでひょっとしてみなさまよくご存じかもしれません。

この当時、渡辺版画店でのオリジナル浮世絵や復刻版、

浮世絵風新作版画の利益のすべてが新版画につぎこまれました。本来創作版画が目指そうとしていた版画による多彩な表現を商売上の採算を度外視して伝統的木版画の技術革新によって推進しようとしたのではないのでしょうか。祖父の心の内をはかり知ることはできませんが、一方で新進の創作版画を応援しつつ他方伝統技法による逆襲を試みていたのではないのでしょうか。浮世絵や浮世絵風新作版画には見られなかったような意欲的作品、実験的な作品が関東大震災までの短い間に生まれています。さらに祖父は制作していくにあたり、黄金時代すなわち寛政年間を中心にして、錦絵の誕生から幕末十八世紀後半から十九世紀半ばの浮世絵を意識して品ぞろえを図っていたようです。主な浮世絵師と新版画の画家を例に取り上げてみますと、浮世絵美人画の春信、清長、歌麿に対して橋口五葉、伊東深水、役者絵の豊国、写楽に対しては名取春仙、山村耕花、風景画の北斎、広重に対しては吉田博、川瀬巴水、笠松紫浪、伊藤孝之などでございます。

これは歌麿「姿見七人化粧　対鏡」という作品です。これに対しまして伊東深水「対鏡」という作品でございます。伊東深水はもう押しも押されもしない有名な日本画家でございますが一八歳の時まず版画を手掛けております。鏑木清方の画塾を訪ねて行きまして同じような話をいたしました。自分はもういいけれど若手で見どころのあるものを紹介しましょうといって一八歳の伊東深水を紹介してくれました。深水は以後五〇年にわたって、私どもで版画を作りまして数は二〇〇点を超えております。ちなみに「対鏡」の紅の襦袢の部分ですね。これの赤の部分だけで二〇回くらい刷り度数を重ねているようです。非常に人気のある作品で五〇〇、六〇〇万円するだろうと思う作品です。これは役者絵の初代豊国「三世沢村宗十郎の大星由良助」。こういう初代豊国のわかりやすくて非常にとっつきやすい浮世絵に対しては、名取春仙「中村雁次郎の紙屋治兵衛」という作品です。最初の作品です。

それに対しまして東洲斎写楽「二世市川高麗蔵の志賀大七」ですね、非常に個性の強い作家、作品ですがそれに対して山村耕花「松本幸四郎の関兵衛」、これは写楽を意識しています。山村耕花自身が写楽は誰だという論文を書いています。小論文を書いている位でかなり意識があったようで、わざとこういう写楽に似たような作品を庄三郎に頼まれて、あるいは自分も面白がって作っている、そういう様子がよくわかります。

それから葛飾北斎の有名な「富嶽三十六景」という作品ですね。それから歌川広重「名所江戸百景　大橋あたけの夕立」。こういった風景画に対しまして川瀬巴水「塩原お

かね路」。これが巴水の第一作でございます。

後ほど申し上げますが、鏑木清方の門下生で伊東深水の作品、特に「近江八景」という風景画を見て、自分のやりたいのはこれだと言って渡辺版画店の門をたたき、その後四〇年六〇〇点に及ぶ作品を作りました作家です。新版画の柱ともいう作家でございます。同じく川瀬巴水「暮れゆく古川堤」です。笠松紫浪「うろこ雲」。これは主役は雲でございます。いかにも創作版画の方たちがやりたそうな題材でやりたそうな雰囲気のものを伝統的木版画でやっているかなと思います。笠松紫浪も鏑木清方の門下生でございます。長生きした方で一九九〇年ごろまで九〇いくつまで長生きされた方です。

吉田博の（左）「穂高山」（右）「帆船　朝日」という作品です。吉田博も洋画家として有名ですが渡辺版画店で関東大震災まで一緒に版画作品を作りました。その後橋口五葉と同様に自分で工房をもって職人さんを監督しながら自分で作品をたくさん作りました。巴水と並んで風景画の巨匠でございます。これらのほかに注文制作であるイギリス人チャールズ・バートレットあるいはエリザベス・キースなどの数人の外国人画家の作品も存在しております。

こういったなかでも川瀬巴水には特別な思い出があったようで、巴水の没年昭和三二年までに標準サイズのものだけでも六〇〇点弱の作品が残されております。

大正十二年九月一日昼ごろに関東大震災が発生いたしました。現在の中央区京橋三丁目にありました渡辺版画店は地震の揺れによる被害はそれほどでもなかったのですが、後刻やってきた大規模な火災によりそれまで蓄えた浮世絵版画はもちろん新作版画、新版画の作品と版木のすべてを一瞬にして失ってしまいました。地震後の混乱と動揺のなか作品や版画を持ち出せるはずもなく貴重な財産は文字どおり灰塵に帰してしまいました。この大震災を機に新版画の作品に変化が見られるようになります。それまでは渡辺版画店の利益の全てをつぎ込んでいわば採算を度外視して売れても売れなくてもいいから理想とした作品を作ろうとしていたわけですが、これ以後にはいかにも売れ筋の作品が多く登場してきます。もちろん震災以前にも売れたであろう作品は少なくありませんが、以後はその比率がかなり増加しています。

これは川瀬巴水「東京二十景　芝増上寺」という作品です。最も人気のある作

川瀬巴水
東京二十景　芝増上寺

品です。同じく川瀬巴水「東京二十景　馬込の月」。これは先ほど役者絵を描いた写楽のような絵を描いていた山村耕花「上海ニューカールトン所見」と言う作品です。上海にありますダンスホールを描いております。八〇年以上前に描かれたというにはあまりにも現代描いてもおかしくないような作品です。外国人のきれいな女性がダンスをしているのはなんかいかにも羨ましそうに描かれております。この扇ですよね、バブルに使われた、これには金粉が使われておりまして非常に豪華な出来上がりになって新版画の全作品の中で最も好きな作品のひとつでございます。「上海ニューカールトン所見」です。

それから名取春仙「市村羽左衛門の入谷の直侍」という作品。先ほどからずっとご覧頂いててなんかこう非常に売れやすいというか非常になじみやすい作品としてご覧いただけるんではないかと思います。

こういう風に作風が関東大震災前から少し変わってまいります。高橋弘明「白猫」という作品です。猫と言うのは題材として浮世絵時代からしょっちゅう取り上げられていますが、ここまで大首絵みたいに取り上げられたのは國芳以来なかったのではないかと思います。つい最近この版木が見つかっておりまして出来れば後刷りを作りたいと思っています。もうすでにリクエストと言いますか注文が一〇点くらいはいっております。まだ版木が見つかっただけで出来るかどうかわからないと言っているのに注文を頂いちゃったという非常に有難い作品です。

私の家にも猫が二匹おりますが毎朝日の出とともに起こされます。このところは四時くらいに起こされますのでかなわないのですが。猫つながりでもう一つ申しますと小原祥邨「金魚鉢と猫」。これは家にいる猫と全く同じなんですが、猫と言うのはやっぱり古今東西よく売れるようで、後にも現代版画で出しますけれども、猫を版画として扱う方が非常に多いようでよく売れます。この当時も同じだったと見えて猫の作品は結構出てまいります。

同じく小原祥邨「芦に鷺」ですね。オランダ人の友人が言ってたんですが、浮世絵の始まりから美人画と役者絵があるわけですね。ところが役者はいつまでも同じ芝居をしてません。それから美人も時間が経つと必ずしも美人でなくなるかもしれませんし、人気がなくなるかもしれないわけです。すなわち賞味期限があるわけです。ところが武者絵ですとか物語絵ですとかあるいは花鳥画とか風景画と言うのは賞味期限ないわけです。増えることはあっても名所はなくなることはない。花鳥画も未来永劫楽しめます。それから物語絵も、もともと古い話ですから、いくら古くなっても構わないということです。何回でも刷り増しをして

利益を上げられるようなことを考え出すんですね。いちばん最初は役者絵と美人画しかなかったんですが段々、ジャンルが増えてきて花鳥画と風景画というのは永遠のドル箱だったようです。これは新版画でも同じで、花鳥画は沢山出てまいります。とくにこの小原祥邨という作家は花鳥画の専門の作家でございます。

先ほど出てまいりました伊東深水の作品で「眉墨」という作品です。これはバックを真っ赤にいたしましてひとつ間違ったらすごく下品な作品になるんですが、さすがはその辺は日本画の巨匠でございまして、非常にきれいにまとめております。同じく伊東深水「現代美人集第二集　吹雪」という作品。これも切手になりましたのでご存じの方もいらっしゃると思います。雪が降っていて傘美人というのは浮世絵の時代から成功の方程式と言います。平野白峰「夏姿　別府」。別府温泉で涼んでいる夕涼みを後姿で描いてます。

それから伊藤孝之の作品でこれはリストに載せてないんですが、昨日お電話を頂きまして、伊藤孝之のお嬢様が日本女子大のすぐ近くにお住いになっていて、今日ぜひこの講演をお聞きになりたいというので、急遽伊藤孝之の作品を御紹介申し上げました。これは「八峰より見た鹿島槍」という作品で北アルプス後立山連峰にあります鹿島槍ヶ岳を描いております。私も後立山連峰はずっと縦走したことがございまして、北の方から南の方に向かって鹿島槍を見ております。従って五竜岳の方から鹿島槍を見ておりまして八峰と言うのがその間にあります。この辺にキレットがあるんですが、何度も何度も細かく上り下りを繰り返して結構難所でございます。私は南の方から鹿島槍を歩いて五竜岳を過ぎたところで登山者とすれ違った時に、崖から落ちかかりましてあやうく死ぬところだったんですが、後で気がつきますとそこは「不帰のキレット」という非常に恐ろしい名前のついた所で一生忘れないですね。余計な話をしまして失礼いたしました。伊藤孝之の「八峰より見た鹿島槍」という昭和七年の作品でございます。考えてみますとね、昭和七年頃にこのアルプスを歩くってなかなか大変なことだと思うんです。吉田博の作品にもアルプスの山の作品がたくさん出てまいります。今かなりきれいになってますけど、当時は相当難所だったと思います。そういうところでスケッチをした伊藤孝之さんて本当にすごいなと思います。

笠松紫浪「春の夜　銀座」。このまん中にたくさん歩いているのが銀座通りだと思います。これはたぶん「東をどり」の看板で、この奥にまっすぐ行きますと新橋演舞場にあたるみゆき通りではないかと思います。いま屋台の寿司

屋ってありえないでしょう。昭和十年頃にはこういうことがあってのどかな時代だと思います。洋装の方和装の方いろいろとり混ぜて銀座を歩いていらっしゃる、非常に面白い古き良き時代を描いたのではないかと思います。

続きまして川瀬巴水「東海道風景選集　日本橋（夜明け）」と言う作品です。東海道五十三次に影響を受けまして、川瀬巴水は生涯ずっと「東海道風景集」と言うシリーズを描き続けました。二六図描いたところで結局はそれ以上描きませんでしたがその第一作の起点になりますのがこの日本橋でございます。今日本橋の上に高速道路が通っておりまして非常に美観を損ねている、取ってしまえという議論が非常になされています。じゃあ、みなさん取ったらどうなるかって考えたことがなかなかないわけでございまして、一昨年の日経新聞、元旦の真ん中のところにこの作品が出ておりまして、日本橋に高速道路を取り去るとこのようにきれいになるという証明として使われました。私ども商売として日本橋の三越さんや丸善さんで展示会をするんですが、必ずと言っていいほどこの作品ないですか、売ってくださいというリクエストがもっとも多い作品のひとつです。実は版木が見つかったので後刷りを作ろうと思ったところもう朽果てておりまして使えません。後でもお話しますが昭和十五年ころというのは資材が不足しておりまして、おそらく別の板を削って他の板を作ったようです。非常に版木の厚さが薄いんですね。従って長い暦年の保存状態が悪かったこともあって真っ二つに割れてしまっており、残念ながら作品を作ることができませんでした。ただこの作品は絵葉書としても大変人気のある作品でございます。

これが昭和十四年頃の川瀬巴水の写真でございます。どういう作品が売れ筋かということはそれまでの経験で十分理解していたに違いありません。スタンスの変更は容易だったと思われます。すべて失った後、大正十四年四月に銀座八丁目の現在のところに店を再開するにあたり、資金的にも以前ほどの余裕がなく、もはや採算度外視と言うわけにはいかなくなったのでしょう。しかし作品としては川瀬巴水の「東京二十景シリーズ」や伊東深水の「現代美人集シリーズ」に代表されるよう誰にでもわかりやすく親しみやすいものが増えています。

一方創作版画の方も昭和期を迎えるころからもはや、自画、自刻、自刷りだけを標榜しているだけでなくその内容が問われるようになっていきました。創作版画の作家はそれぞれに個性的で多種多様な展開を見せるようになっていくんですが、大震災後の新しく変貌する東京、近代都市生活の風景や風俗を描いた作品が目立つようになっていきます。これもやはり一般大衆に受け入れられてこそ、より具

体的にいえば売れてこそ作品が評価されているんだという認識が創作版画の作家たちの間のなかでさえも強くなっていったのではないのでしょうか。

これが前川千帆「地下鉄」と言う作品です。今日東京最後の地下鉄と言われる副都心線が開業されましたが、一番最初の地下鉄は昭和二年でございます。浅草上野間に一九二七年、八一年前にできました。昭和六年には浅草から神田まで伸びておりました。信じられない話なんですが最初開業したときに、職員の方は運転手から車掌、切符切りの人まですべて背が高くていい男を揃えた。イケメンの男性を揃えたんだそうです。そうしましたところ、乗客のほとんどが女性だという。それで乗るのに一時間待ちだったという。わずか上野から浅草ですよ。一時間待ち、まるで遊園地のモノレールの状態だったようです。当時は五万人の乗客があったそうです。それでも一時間待ち、考えられないですね。そういったところを描いております。この前川千帆は版画家としてというよりは漫画家として有名でございまして『あわて者のくまさん』という、マンガで非常に人気を取った方でございまして、穏やかで無欲、のんきな人柄そのままの作品が出来上がったといわれております。

先ほど抽象画の先駆けだと称しました恩地孝四郎の「新東京百景　東京駅口」、これは丸の内口ですね、これは関東大震災で壊れたんですが立て直しをしまして、それを描いたものです。抽象画ばかり描いているかというと恩地孝四郎も具象画も実は非常にうまいんですね。

続きまして深沢索一「新東京百景　神宮場早慶戦ノ日」。深沢索一は、新東京百景の元締めと言われる方で鉄橋や港、カフェ街、ガソリンスタンド、野球場などいわゆる東京の空気やにおい、人の息づかい、こういったものが感じられるような作品が多いといわれて完成度の高い作品が多いです。ちなみにこの早慶戦というのは明治三六（一九〇三）年から行われていたようです。関東大震災ののち大正十四（一九二五）年に六大学リーグとなりまして、大正十五（一九二六）年には明治神宮球場もできて六大学リーグはプロ野球もない時代スポーツの花形となっておりました。私も慶応義塾大学を卒業いたしましたので全試合、慶早戦にはいきましたが、社会に出てみて早慶戦というのが普通だということに初めて気がつきました。最近また学生野球が復権いたしまして、ハンカチ王子の斎藤祐樹投手などで早稲田がたいへん人気があります。また早慶戦にかつてのにぎわいが戻ってきたように感じられます。

藤森静雄「大東京二十景の内　五月　夜の銀座」と言う作品です。これ昭和八年の作品です。私は大学を出た後に五年間ほど外で勤めておりました。この時計台があります

銀座の和光に勤めておりました。婦人用品売り場でセーター、ブラウスを売ってさらにそのあと外商部で外回りをしておりました。入ってすぐに時計台五〇周年記念でイベントをやろうという話になりました。私、昭和五六年に卒業しましたのでこの建物は昭和七年にできたということを一生忘れないと思います。できたばかりの銀座のシンボル服部時計店の時計台を描いた作品でございます。藤森静雄というのはですね、本来は恩地孝四郎と同じグループでございまして野性的な魅力と個性あふれる作品が特色なんですが、昭和初期になりますとこういう浮世絵がかつてやっていたような作品も作るようになっていったようであります。

次に藤牧義夫「都会風景」。新しくどんどんできていく東京の姿をすべての人が喜んでいたわけではないようですね。藤牧義夫さんという方は館林から上京いたしまして、どうも都会になじめなかったようですね。都会に暮らす悲しみとか苦しみと言うのを版画によく表していると。これ一点しかご覧頂かないので残念なんですが、都会はただ美しいだけの存在ではなくその痛みをありありと伝えているといわれております。二四歳のある時、同僚の小野忠重と言う方に全財産と言っても自分の作品と本だけなんですが、それを預けていつの間にか行方不明になって、それっきり版画の世界からいなくなってしまった。非常に気の毒な方でございます。

小泉葵巳男「昭和大東京百図絵版画　両国の川開き」。静岡から上京してきまして伝統的木版の彫師の修行をいたしまして一人前になったところではっと気がついてみるとたいして仕事はないし周りは創作版画の方ばかり。だったら自分で作ろうということで作品を作るようになった方でございます。自分はあくまでも現実の日本を作ろうと思っている。『木版画の彫り方と刷り方』などという本も出版しております。それであるとき自分の作品をもって横浜の貿易商に行って自分の作品を扱ってもらえないかと聞いたそうです。あなたね、電柱やビルディングを描いただけで売れないですよ。どうせ作るならこういう作品を作ってくださいといって渡されたのが、広重の作品であり、川瀬巴水の作品だそうです。自分で何とかして売るからということで頒布会を始めました。「昭和大東京百図絵」版画の頒布会を始めて、最初九人お客さんがいたそうです。二月に三図のペースで作っていたようですが、作っては奥様が九人のお客様のところに納品に行ってお金を頂戴してくるわけですが居留守を使われたりもういらないといわれたりして一番少ないときは四人しかいなかったようです。それでもあしかけ十三年かかりまして百図全部完成いたしました。当時は残念ながら売れなかったようなんですが、先日

「なんでも鑑定団」にこれ全部揃いで箱ごと出品された方がいまして、私七〇〇万円と評価させていただきました。実はこの七〇〇万という数字は数年前に浮世絵のオークションがありまして、やはりセットが出ました。その時に先ほど、浮世絵に賞味期限がないジャンルを作ったということで紹介したクリスというオランダ人、ホテイパブリッシングという出版会社の社長ですが、その彼自身が買っていきましてヨーロッパで何度も展覧会をしているという話を聞きました。日本のお宝になるようなものはどんどん外国に流出してしまうというのは私の祖父の時代だけではなく今日も続いているんですね。この小泉葵巳男につきましては、靖国神社の近くの昭和館と言うところにそのセットが残っております。それから信州の新町美術館というところにも遺族の方が寄贈して残っております。それとオランダのクリスのところ。先日の鑑定した方。少なくとも四セットがあることがわかっております。

先ほど「昭和百図」を頒布会しててお客が四人しかいないと申しましたが先日倉庫を見ておりましたら同じ図柄が一〇枚二〇枚とでてくるんですね。図柄は五図くらいですけど私の祖父も四人のお客の一人のようで、苦しんでいる姿を見てどうも一〇枚まとめてくれとか二〇枚まとめてくれといって買ってあげていたようです。うちの祖父は創作版画と喧嘩をしていたわけではなくて応援していたということがよくわかるわけです。浮世絵師が昭和にいたら描きそうな題材を、そろそろ創作版画の方も描き始めたということです。

続いて織田一磨「松江大橋」と言う作品です。織田一磨は町の記憶を描きとどめる孤高の石版画家と言われておりますが、自分で、自刻、自刷りをやるときには石版、いわゆるリトグラフで作りますが、渡辺版画店を通じて木版で新版画も作っている非常にユニークな方でございます。夜や闇を描いたのが多いですが、これは松江大橋です。日本海側の中国地方山陰地方を描いた一連のシリーズが残っています。創作版画家の作家から見た伝統木版画や新版画にはかなりの温度差がありまして恩地孝四郎のように浮世絵など伝統的木版画を徹底的に否定する急先鋒もいれば伝統的木版画の彫師としてスタートし、自刻自刷りにはこだわったものの現実の日本を描こうと努力して「新東京百景」を作り上げた小泉葵巳男。彼は広重に大変憧れていたとも聞いております。また自ら『創作版画や版画の作り方』という本を書き、自刻自刷りにも固執することなく江戸情緒あふれる作品を制作し錦絵と近代版画を繋ぐ人と呼ばれていた戸張孤雁。専ら石版画でその時代を記録するかのように風景画を描き続け、木版画では渡辺版画店から自らの作

品を新版画として出版している織田一磨など各自各様でございました。関東大震災のあと第二次大戦までの約二〇年間新版画への平易さへの転換、創作版画の題材への大衆化。これはいずれも売れ筋を多少なりとも意識した結果と思われます。

かつて一方は浮世絵を発展させ浮世絵にはないものを創造しようとし、他方は浮世絵とは根本から違う版画の世界を創造しようとしたにもかかわらず、皮肉なことに結果として双方が浮世絵により近づき、お互いが非常に近い存在になっていたといえるのではないでしょうか。販売と評価という点では、新版画は海外を中心に欧米人のこうあってほしいと思える日本の風景や風俗が描かれていたこともあり大いに売れました。しかしながら国内での評論家の評価は現実の日本の風景を描いていないとか今更浮世絵の延長線上の作品などと評価が低く、新しい創作版画に対しての評価の方が遥かに高いものがありました。さらに浮世絵系の研究者も創作版画に対して肯定的でむしろ応援していたほどでした。ところが創作版画の売れ行きは国内外ともあんまりふるわなかったといえます。

ちょうどこの時期に新版画、創作版画の双方共が海外への展覧会へと打って出ることとなりました。関東大震災前に結成されていた日本創作版画協会や洋風版画協会及びほかの団体に属する版画家は、海外での日本版画の展覧会を目指して昭和六年に創作版画の大同団結ともいえる日本版画協会を設立しました。昭和九年にはフランスのルーブル宮殿の一角にあるパリ装飾美術館で「日本現代版画と源流展」が開催され、浮世絵から創作版画に至るまで、日本版画約六五〇点が二か月間展示されました。展覧会はおおむね好評を博したと言えます。さらに昭和十一年には二つの展覧会が多大な苦労の末に一年間をかけて欧米を巡回いたしました。これらはすべてが成功したとはいえないまでも日本の創作版画紹介の役割は十分に果たしていたようです。

今ご覧頂いておりますのがそのルーブル宮殿の一角で行われました日本版画協会展パリ展での会場の写真でございます。一方新版画の海外での展覧会は創作版画より早く昭和五年にアメリカ、オハイオ州トレード州で橋口五葉、伊東深水、川瀬巴水、織田一磨、山村耕花、吉田博など三三六点が現代日本版画展として開催されました。これは大好評を得たようで昭和十一年に同じ会場で再度開催されました。また昭和八年秋にはワルシャワでの国際版画展覧会で伊東深水、川瀬巴水、名取春仙、小原祥邨の作品が出品され展示即売したところクリスマスの贈答用に数千枚から、一万を超える新版画が海を渡ったといわれております。ポーランド大使を迎えてワルシャワでの国際版画展での大成

功を記念して一席を設けたということでございます。一番手前におりますのが私の父渡辺規、これが渡辺庄三郎、伊東深水、川瀬巴水、小原祥邨でございます。こちらがポーランド大使と通訳でございます。

ところがここで残念な事件が起こってしまいました。日本版画協会での版画展覧会では浮世絵版画を創作版画の源流だと位置づけをして展示しておきながら、川瀬巴水や伊東深水など、新版画を展示対象から除外してしまったことです。これには国際浮世絵学会の名誉会長であります楢崎宗重先生が若き日に編集長を務めた『浮世絵芸術』を中心に大きな反発の声が上がってきました。もともとは私の祖父や浮世絵研究家は創作版画を擁護し激励していたにもかかわらず、創作版画と新版画の側で長い論争が繰り広げられることとなってしまいました。

川瀬巴水の親戚の写真でございます。先ほどから川瀬巴水の作品をご覧頂いていますが、純日本的な作品で着物も着ておりましてさぞや純日本的な方だとつい最近まで思っておりました。実は巴水の弟さんがここにおります。弟さんは商社に勤めておりましてイギリスに長らく駐在してロンドンでイギリス人の女性と結婚いたしまして、その結婚式で日本に帰ってきて、お披露目でございます。その時の帝国ホテルでの写真でございます。川瀬巴水は純粋な日本人でアメリカ人やヨーロッパの方と全くかかわりあいがないと思っていたら、義理の妹さんがイギリス人だったという非常に国際人だったということですね。つい一昨年だったと思いますが、ここに小さいお嬢さんがいらっしゃいます。この結婚のお祝いとして弟さんの為に川瀬巴水が描いた屏風がありまして、それをこの方がサザビーズに出品されました。私も欲しいなと思いまして、エスティメート三〇〇万円とか書いてあるんでひょっとしたら全財産はたけば買えるなと思っていたら四倍くらいの値段になってアメリカ人の女性の業者さんが買っていき、あっと驚く展開になりました。川瀬巴水は実はインターナショナルな人だったということですね。

さて、川瀬巴水の作品などで渡辺版画店以外の版元から新版画が出版されるようになったのもこのころです。昭和九年の偽作の肉筆の事件、春峯庵事件が起こるほどの浮世絵ブームを追い風として、昭和初期には川口酒井版で鳥居言人の美人画や小原祥邨の花鳥画、あるいは川瀬巴水の風景画が作られました。また金子孚水版で高橋松亭の風景画、美人画など、土井版画展からはノエル・ヌエット、川瀬巴水の風景画が、東京尚美堂、芳寿堂、日本美術社などでは川瀬巴水の風景画がしきりに制作され海外向けに売り出されました。

先ほども出ておりますが川瀬巴水「東京二十景　芝増上寺」と言う作品です。大変に人気があった作品で偽物が出て裁判沙汰になったほど人気があった作品でございます。これでご覧頂きますと、雪が降っていて赤い建造物があって傘をさす女性が歩いている。これは成功の方程式でございまして、このパターンで描いたものは、みな売れ筋作品としていまだに人気があります。これは酒井川口版から出しました「雪の増上寺（酒井川口版）」ですが、同じ場所を描いているから仕方がないんですが、なんとなく同じ絵になっております。これも同じく酒井川口版の川瀬巴水。これもいまだに後刷りがありますが大変な人気でございます。

酒井川口版の鳥居言人「雨」という作品ですね。赤い建造物はありませんが傘をさした女性っていうのは昔から美人に写るパターンですね。これは新版画も踏襲しております。

川瀬巴水「不忍弁天の雪（東京尚美堂版）」、これ弁天堂ですけど、ここに住まわれているご住職がいらっしゃいまして、川瀬巴水の大ファンでございます。何度も絵を納めさせて頂いたそうです。川瀬巴水「東京二十景　荒川の月（赤羽）」と言う作品です。こういう作品に対して、川瀬巴水「五月雨（荒川）（土井版）」という作品です。川瀬巴水「暮るる雪」と言う作品です。雪が降っていて赤い建造物はありませんが傘をさした女性がいます。渡辺版の川瀬巴水「東京二十景　馬込の月」ですね。川瀬巴水「春の月」。何となく似ていますね。同じく川瀬巴水「冬の月」。ただ渡辺版画店の作品を見ながらまねしたというだけではございませんで同じ作家が描くわけですからどうしても似た構図はできるわけです。

例えばこれは芳寿堂版という、詳しくわかっていない版元が出した作品で川瀬巴水「雪の夜」。ディズニーランドがあるとは思えない寒村でございますが、「雪の夜（浦安）」と言う昭和七年の作品です。どっかで見たような構図で川瀬巴水「尼崎大物」。渡辺版画店で作った作品。このように似たような構図というのはどうしても出てまいります。だからどっちがまねしてどっちが良いとか悪いとかということではないと思います。

余談になりますが川瀬巴水「Miyajima Shrine in Snow」という英語のタイトルが入っている作品でございます。鉄道省観光局が日本に海外からお客さんを呼ぼうではないか。誘致しようではないかと言う一大キャンペーンをいたしました。その時に作られたポスターがありまして一万枚の版画作品がこういう風にべた貼りされて世界中に配られました。一万枚作るの大変なんですね。一回にわれわれ一〇〇枚作るのに一か月かかるんですが当時三種類の同じ版

木を作りまして三か所で引っ張りと言って職人さんを何人か使って一辺にできるだけ早く作らせるわけですが、三五〇〇枚ずつ三か所で作らせたと聞いております。これをべた貼りにして外に貼ってたんですね。野外に。渡辺版画店の特色を逸脱しておりましてブルーの色とか赤の色がちょっと濃いですね。よその版元で使っているような色なんですが。二つ理由がありまして、野外に貼られるということは最初から想定されているので退色しにくい色を使った。それから二つ目に外国人が喜びそうな色を使ったということですね。渡辺版画店の作品としてはちょっと異色の色合いになっております。あとで紹介しますが巴水の作品は平均的に三〇回くらいの刷り度数がありますが、これはわずか十二回ですませております。浮世絵と同じくらいの刷り度数になっております。それでも十分に効果的になっているかと思います。

同様に伊東深水の作品も使われておりましてこの「娘道成寺」という作品が同じく一万枚刷られてポスターとして配られました。先ほどのポスター自身もあわや捨てられる運命にあるのをたまたま私が見つけて助かったんですが、江戸東京博物館で展覧会がある時にあのポスター見せたら、泣いて喜んでおりました。どこいってもないんだって言われました。なかなかポスターというものは捨てられてしまう運命にあるのですね。例えば伊東深水のポスターも私どもにはありません。あるスウェーデンの業者がポスターが出てきたので買わないかと言って持ってきたんですが、法外な値段を吹っ掛けられたのでその時あきらめました。今となっては買っといた方がよかったのかなと思いますが、お金がないもんですから買えませんでした。

例えば巴水の作品でしたら、渡辺版画店での売れ筋作品を深く研究し雪景色に赤い寺院や神社、月が美しく映る水辺、雨の降る町の夕景などが作り出されました。これは綿密なマーケティングとリサーチによるもので今日に至っても国の内外を問わず、人気が大変に高いです。ただしこれらの新版画は長続きせずその多くが短命に終わっています。基本的には新版画も浮世絵や新作版画と同様に商品でありまして版画制作のための産業としての体制がすでに整っており、版画商や書店が版元ととなることが資本さえ十分にあれば可能でございました。機を見るに敏なことはいつの時代でも商人の特性でございまして昭和初期の経済不況の中、新版画は輸出を中心に隆盛を極めて行きました。結果的にみると皮肉にも不幸な関東大震災が起こったがために新版画と言うジャンルが確立されたのではないかと思います。しかし二・二六事件、日中戦争、やがて不幸な第二次大戦が始まり輸出の道が細くなりやがて閉ざされてし

まいました。国内の生活事情も逼迫してきた昭和一〇年代後半、資材も不足し国内の需要もほとんど見込めない状態で従業員や職人ばかりか渡辺版画店二代目の渡辺規も二度にわたる出征を余儀なくされ、渡辺版画店も開店休業状態となってしまいました。

昭和二〇年八月終戦を迎えてやがて東京に進駐軍がやってきました。日本の美術品を代表する版画は手ごろな土産物として大いにもてはやされ、版画の世界は未曽有の活況を呈するようになりました。新版画は勿論創作版画も一大ブームとなり大いに売れたといいます。これは川瀬巴水の「時雨のあと（京都南禅寺）」という作品です。新版画はかつて関東大震災のあと一度方向転換が図られました。第二次大戦後にもう一度更なる方向転換が見られます。もう一段と平易な、言いかえれば風景なれば名所絵的な土産絵もの的な作品が増加しています。やはり当時の需要に合わせたのでしょうか。これが同じく巴水「富士の雪晴（忍野付近）」の作品です。

伊東深水の「楽屋」という作品ですね。これも黒と黄色というケンカ色、大変印象的な色を使ってなおかつ非常におさまりのいい三角形も多用して、非常に面白い構図の作品かと思います。これは昭和十五年ちょっと時代が遡りますが、ロバート・ミューラーさんという新版画の世界的なコレクターがおりまして、その方が新婚旅行で日本を訪ねた時の写真でございます。真ん中にいるこの方がミューラーさんの奥さまですね。これが川瀬巴水、こちらが伊東深水とその奥様、渡辺庄三郎、笠松紫浪、うちの通訳を兼ねた番頭さんです。伊東深水の庭で撮った写真でございます。ミューラーさんは数年前にお亡くなりになって、彼のコレクションのうち優れたコレクション四〇〇〇点だけが博物館に寄贈されました。みなさん、優れた作品四〇〇〇点だけ寄贈されたってことは、そのほかに何千点もあったってことですからね、これは恐ろしいですね。私、ミューラー・コレクションだと称する作品をいくつか買いましたけど、中にはご安心ください、つまらない作品もたくさんありました。だいたいコレクションと言うのはですね、いいものだけ集めるって言うのが不可能なんです。集めるためにはどんな駄作もいっぱい買って三角形の頂点の部分、ピラミッドの頂点の部分だけ名作があって、あとはつまらなかったり玉石混淆のようにですね、つまんない複製があったりするのが当たり前でございます。だからミューラーさんは四〇〇〇点もその頂点があったというのはすごいことで、その底辺にはどれだけ作品があったのかと思うと、ほんとに二十世紀の有数なコレクターの一人として称えられて当然だと思っております。

これが「増上寺の雪」、当時の文部省が伝統的な浮世絵の技法を後世に残そうということで、伊東深水の「髪」という作品と巴水の「増上寺の雪」がスケッチの段階から完成するまで、すべての記録を文部省がとりまして、保存いたしました。出来上がった作品のほとんどを買い上げていただきまして、こういった作品は当時大統領ですとか国王が日本を訪ねた時のお土産として配られたんだと聞いております。ところが十数年前にこれを我々の先輩が探しに行ったところ、どうしても見つからなくて文部省に聞いてもそんなの知らないと言われて、ようやく作品だけ見つかったら引き出しの奥にぐちゃぐちゃになってたと。せめてぐちゃぐちゃになってるのは見るに忍びないからはさみ紙に入れて下さいって言ったら、前例がないから触らないでくれと言われたと。それで地元の代議士にあまりにもひどいじゃないかという話をしたら、つぎの日朝一番で電話がかかってきてぜひお願い致しますと言われたそうです。この作品、長らく版木から何から行方不明になっていたんですが、去年の暮に上野の東京国立博物館で一番最後の部屋で日本美術の代表のような顔をして部屋の半分を使って順序刷りと版木が飾られておりました。浮世絵学会のわれわれの仲間が学芸課長になったので発掘してくれたんですね。インディ・ジョーンズのラストシーンのような東京国立博物館の収蔵庫の中からわざわざ探していただいて、いちばん最後に飾っていただいて。お客様からそれを聞いてすぐ見に行きまして、涙が出るほどの思いで嬉しかったですね。当たり前なんですが、当たり前のところに入っておりましたが、その学芸課長の話だと、ここだけの話だけど、実は近代美術館に寄贈したところ断られてしまって、仕方なしに東博で引き取ったようですと。近代美術館が受け取りを拒否したという考えられない話を伺いました。ここだけの話ですからここだけのことにしておいていただいて。

その時に作られましたのがこの伊東深水の作品。これも同じように記録として東京国立博物館に入っているようです。

初代渡辺庄三郎も還暦を過ぎたものの意気軒昂、二代目渡辺規も無事復員して、気力十分の働き盛りの庄三郎に代わって獅子奮迅の活躍を見せていました。しかしながら、渡辺版画店は大震災の資金不足と同様、あるいはそれ以上に背に腹は替えられない状態でした。まずは確実に売れる作品をつくり経済的な立ち直りを優先的課題とせざるをえなかったと思います。戦争末期の空襲による被害も多く、物資の不足から版木の再利用なども行われました。貴重な新版画の版木が削られて別の版木へと姿を変えたのも終戦をはさんだこの時期です。今日でも残っている新版画の版

木を見ると渡辺版画店が銀座で再興した大正十四年から昭和一桁ごろの版木には、厚めでしっかりとした桜の板が使われており、今でも保存状態のよいものが多いですが、昭和一〇年代後半から二五年くらいまでの版木は総じて薄めで、保存状態が極めて悪いです。年代が新しいからといって必ずしも使用にたえないのは残念でなりません。

川瀬巴水は戦後になりますと、ジャパントレードと言って日本の貿易商ですが、そこの雑誌の表紙を飾ったときにこのような「サンタクロース」なども茶目っ気たっぷりに描いております。これは清澄庭園などをバックにしていると思いますが、非常に珍品でございます。これは作品として売り出したのではなくて雑誌の表紙を飾るためだけに作った作品なので非常に枚数が少ない。大珍品でございます。

これが「奈良薬師寺」の作品です。雪月花などと申しますが、この時代でもやはり雪景色は人気がございます。これが「春の夕（上野東照宮）」という作品ですね。これが雪月花、「愛子の月（宮城県）」。今朝、地震がありましたが震源地の古川のすぐ近くでございますが、古川に知り合いがございまして聞いたところ、これ何の変哲もないところなんだそうです。なんでこんなところを描いたのかというくらいのところを如何にも名所のようにするのが巴水自身が言っているんですけども、腕の見せ所だったようですね。名所でもちょっと絵葉書になるようなところからちょっと角度を変えて描いてるところに少々特徴があるように思われます。

これは渡辺庄三郎の創業五〇年の祝賀会というのを昭和三一（一九五六）年開催して頂きまして、その時の写真で、手前が伊東深水、川瀬巴水、笠松紫浪かなと思います。これが川瀬巴水の一番最後の作品、絶筆「平泉金色堂」という作品です。私、二週間前にここに行ってまいりましたが、実はここに描かれている御堂の中に金色堂があり、一一二四年の藤原時代に作られたものです。外側を覆っているのが一二八八年に建てられました覆堂という建物だそうです。いまもうこれは二代目の覆堂になって、コンクリート造りになっておりますが、巴水が描いたこの覆堂は右側に移築されております。これ自体七〇〇年の間この中にある金色堂を守っていたわけです。巴水の描いたこの昔の覆堂も非常に貴重で、資料的価値もこの作品はでてきて

川瀬巴水
平泉金色堂

いるのかなと思います。この作品についてはまた後ほど詳しくお話しいたします。

創作版画は戦後海外での版画コンクールでの華々しい活躍が続出し、一躍脚光をあびることとなりました。これは斎藤清「会津の冬五〇柳津」という作品です。昭和二六年にはサンパウロ・ビエンナーレで銅版・画家の駒井哲郎と斎藤清が日本画や洋画を差し置いて受賞し、棟方志功は昭和三〇年のサンパウロ・ビエンナーレと昭和三一年のベネチア・ビエンナーレで版画大賞を受賞しました。国内の美術会でも一躍版画の地位を向上させる一段と明るい話題を提供することとなりました。過去の偉大な浮世絵も国内で再評価されることとなり以後日本は世界に冠たる版画大国へと上り詰めていくこととなりました。これが斎藤清の作品です。

次に畦地梅太郎の「助かった鳥」。山男などをよく描いている作家ですが、もう一目見てこの作家だとわかる作風ですね。次に笹島喜平「伐折羅大将」。この方も凹凸をはっきりだした拓刷りで有名な方です。仏像画や奈良の風景などを描いております。伐折羅大将という仏像を描いております。関野準一郎、創作版画の中では一番浮世絵風の作品を残した方でございますが、「西陣雪」という作品です。中山正「フルートを吹く少女」という作品ですね。今でもこの方、お元気で軽井沢で活躍されてますが、私この方と親しくて自分の結婚式の引き出物にこの作家のこの蝶々の部分ですね、こういった作品を作っていただき、引き出物として配らさせていただいたところ、数年前にYahooオークションを見ますと相当な高値で取引されておりまして、嬉しいような悲しいような。

これが海野光弘さんの「追陽」という作品ですね。この方は静岡の方で三九歳で亡くなってしまった非常に残念な方なんですが、一八〇×九〇センチくらいの相当大きな作品でございます。同じく海野光弘の「秋露」という作品ですね。これも同じ大きさです。前田光一の「水鏡の家1」という作品です。海野光弘さんの義理の弟さんです。

今日、創作版画と新版画は異なる大きな二つの流れとして認識されていますが、基本的に芸術性の高いものを目指した所は同じはずでした。しかしその過程が全く違っていたためにお互いに対立していたこともあったようです。より個性的な創作版画の中に技術のつたないものもあれば、より洗練されている新版画のすべてが優秀な出来栄えというわけにもいかないように思います。

本来素晴らしいものを作り上げようとする意志の点では両者とも同じですから、お互いの長所を伸ばし、欠点を補えることができるのならばこれに反対する理由はないでし

よう。渡辺版画店の二代目規は昭和二九年から若手の創作版画を店に集めて版画懇話会の例会を開催しました。そこではわけ隔てなく、伝統的浮世絵から新版画に至るまでのオリジナル作品を会員の前に並べて刷りの技術を教えたといいます。一方では若手の創作版画家は各自の作品を持ち寄りお互いに意見交換や疑問点、その質問回答などなかなか熱心な会合であったといいます。これはただただ、日本の木版画の発展を願っての企画であり昭和四〇年代前半まで十数年続けられたと聞いています。この時以来渡辺版画店に創作版画が展示され浮世絵や新版画とともに販売されるようになりました。渡辺版画店には現在も版画懇話会についての資料の一部が存在しておりますが、日々の雑事に忙殺されて研究に手が回らないのが残念です。学問的研究によりますとこの版画懇話会をもって、新版画と創作版画の垣根が取り払われたとされているものもあります。いま私どもの店頭で売っている作品ですが、池上壮豊「赤富士翔」という作品でこれはシルクスクリーンの作品です。

赤富士の作品はお祝い、贈答によくつかわれておりまして東京では西から東に向けてかけると開運だと誰かがいったようで、非常によく売れます。家の裏にドクターコパの店があります。同じようなことを言っております。藤田不美夫の「早春の川岸」。これも油絵の画家でございまして、油絵の絵の具を使った版画を作っております。私どもの売れ筋商品のひとつでございます。

木村義治「夏の朝」と言う作品です。非常にきらびやかな作品なんですが、先ほど「伐折羅大将」という白黒の仏像画がありました。笹島喜平のお弟子さんですが全く違う作品を作っております。面白いですね。必ずしも弟子だからと言って師匠の真似をするわけではないということです。渡部正弥の「木道橋」。これは燧岳を描いております。私も去年の六月、ちょうど一年くらい前に尾瀬ケ原に行きましたが、どこから人がわいてくるんだろうというくらい人がいます。こんな一瞬などまずないですね。ですから版画家というのは描きたい絵を描いてる、人物は消してしまえばいいんだと。こういったところが浮世絵に影響を受けているところなのかなと思います。

杉山元次「隅田川秋の夕景」。版画家の多くは、版画だけで飯が食えるわけではない、版画だけで生計がたてられるわけではないんです。多くが学校の先生をやっていたり、他の仕事をしております。この杉山元次さんも五〇歳にして初めて版画教室で版画を勉強いたしました。それで版画の虜となって六五歳の定年を機に版画家として一本立ちした、胸を張って版画家として独立いたしまして八十数歳になりますが、年はとっておりますけれども非常に意気軒昂

で若々しい作品を描いているのが特徴でございます。これも同じ杉山元次の「お台場の夜」と言う作品です。

先ほど猫の作品が売れるという話をしましたがこの西田忠重さんの「猫」は大変に私どものところでも売れておりまして、まねき猫とはよく言ったもので、入口の所に猫を置いておくと、あらかわいいわねといって女性のお客様がよく入ってきます。

これが並木一の「伊佐沢の久保桜」と言う作品ですね。中島千波さんなどで桜は有名ですが、実は版画の世界では並木一さんというのは外国にも名が通った作家で、桜の作品はとても人気があります。一メートル×六〇センチくらいの大きな作品です。それをややクローズアップした作品がこの「枝垂れ桜2」と言う作品です。具象画ばかり扱っているわけではなく、私どもは天野邦弘さん「Morning Moon 90」のような抽象画も扱っております。これは鳥が同じ方向を向いているので、たとえば結婚の引き出物、結婚のお祝いなどによろしいわけなんですが、中にはそっぽ向いてるのがあるのです。これ全然売れないんですね。やはりそっぽ向いてるのは仲が悪いと思われて、とてもじゃないけど結婚のお祝いじゃ差し上げられないしということで、先生にお話しして同じ方向に向いて売りやすいように作ってくださいよ、そんなこと言っても自分のイメージで作るからなんていって、せめてタイトルだけでもなんて話をするのですが作家の先生はそういう事を全然気にしないんですね。

これは為金義勝の「White Rain」という作品。為金さんというのは私とほぼ同世代で、音楽にちなむタイトルが非常に多くて、私もクラシック音楽好きなんで、先生いいですね、名前に七つのシンフォニーとか書いてと言ったら、そんなこと言うけど家のかみさんがピアニストで朝から晩まで聞かされてるとたまったもんじゃない、と言っていました。だけどタイトルだけはそこから頂戴したなんてことを言ってます。

これは船坂芳助の「M340」、もう何を描いているかはっきり言ってよくわかりませんが、こういう作品も私どもで売っております。先ほど杉山元次さんの話をしましたが、杉山元次さんの先生が船坂さんですね。先生の方が年下でございます。これが河内成幸「翔べ北斎Ⅷ」、この河内成幸さんは私より一〇歳年上の方で山梨県の出身です。それでかつて中井貴一が主役した風林火山というＮＨＫの大河ドラマがありまして、その時に武田信玄についてちょっと浮世絵を見せてくれということで、見せてあげたんです。浮世絵にはまりましてね、その後浮世絵のテーマを描くようになりまして、だんだん作品の中に北斎が取り込まれち

ゃったのか、北斎の中に自分の作品を入れちゃったのかよくわかりませんでした。先日、河内成幸さんのご出身の多摩美大で講演をさせていただきまして、この作品をご紹介させていただきました所、わかりました。実は版画科の裏にニワトリを飼っていたのですね。それがイメージだってことがわかりまして。いまだに河内成幸はこんなところにニワトリを飼ってたのかと先輩後輩の方がみんな言っておりました。河内成幸の「翔べ北斎」シリーズ全部にこの大波を使っておりますが、この作品も私どもも売っております。この方は実はとても面白い方です。版画家って無口で交際下手な方が多いんですが、この方は全く反対で、私と違って非常によくしゃべる方です。個展をやりますと自分からお客様に寄ってくるんですね。二〇年くらい前に初めてこの方と知りあったんですけど、西条秀樹みたいに非常にカッコイイ方で、細くて背が高くて、長髪にしてて若い女性が群がっていました。先生の作品これください、あれくださいと言っていました。二〇年経ってこの前行きましたらやはり相変わらずカッコイイんですけど、群がってるおば様たちがやはり同じように先生の新作素敵だわといって、先生の作品見ないで顔見て買っているんですね。非常に面白いユニークな方でございます。

これは渡辺家三代の写真でございまして私の祖父庄三郎と祖母千代、父規と母の真理子で、これが私でございます。たぶん昭和三六年ころの写真。三七年に祖父が亡くなっておりますがそのころの写真でございます。

今日渡辺版画店ではオリジナル版画、浮世絵復刻版、新版画、創作版画と多くのジャンルの作品を取り扱っています。創作版画も、自画、自刻、自刷りで制作する方もいれば、専門技術者に制作を依頼する方、共同制作をする方さまざまです。いまや大正昭和期の新版画が国の内外を問わず愛好され、研究の対象とされ、多くの展覧会が開催されています。大変に喜ばしい限りではありますが、一方で木版画の業界では後継者不足と技術保存の危機が叫ばれています。冒頭でお話ししましたように浮世絵の評価が国際的に認知されてきた明治後半に浮世絵そのものが衰退し消滅していった事実があります。せっかく浮世絵以来の木版画および新版画のすばらしさとその技術が国際的に認識されてきた今日、まさにこの技術が危機を迎えています。歴史は繰り返すといいますが、技術の保存継承さらに発展こそ

渡辺家三代

が使命とはわかってるのですが、極めて困難な課題に直面し三代目の私は日々悪戦苦闘しております。ただ幸いなことに去年の四月に二〇代の若者二人が刷り師を目指して家を訪ねて来て、いま見習いの弟子として四七歳の職人さんのもとで働いております。非常に見込みがあって、これは将来有望。私の眼の黒いうちになんとか仕込んでこの技術を次代に繋げたいと思っております。

最後にもう一度巴水の作品をご覧いただきます。この作品は「東京十二題　春のあたご山」という大正十年の作品です。東京十二題について巴水はこのように述べています。「見慣れすぎたせいか、いつでも描けるという油断か、どうも私は東京を見る感じが鈍いようであります。がしかし、一度ここぞと思いますと生まれた時から住んでいるところだけに、何か自分のものと言う不思議な力がでて思うままに写生ができるというのがつねです。私はそうした心の支配によっていつもこの制作を致しました。これが東京十二題についての私の感想というよりも経験でした。この十二題は必ずしも名所のみをえらんだというわけではないので、その折々興の赴くままに筆をおろしたものですから、いくらか題材の偏っている感じがあります。最もこの広い東京をわずか十二枚に尽くせるはずもありません。なお第二集、第三集を逐次、制作する考えであります。」このようにのべております。第二集、第三集というのは「東京二十景」とか「新東京百景」、こういったものになっていくのかと思います。

「春のあたご山」につきましては同じく巴水は、「一重は既に散って心地よい若葉に包まれた愛宕山の神社の裏手です。ここに一本満開の八重桜がひらひらと散る華吹雪は春の終わりを恨む姿とも見えました。」このように述べています。ご存じのように愛宕山と言うのは港区にあります小高い丘でＮＨＫの放送センター、放送博物館などもあるところですが、今でも桜の名所でございます。二〇年ほど前に神社の宮司がかわりまして桜の枝を全部きってしまった時期があります。なんでそんなことをするんだと地元の人が抗議に行ったところ、人が集まりすぎて困るんですという馬鹿なことを言ってたものですから、新聞にその話が載りまして、かえってものすごい人が集まるようになりました。神主は心を入れ替えて頂上のところにきれいな庭園を造り、池まで作って、より人がたくさん来るようになりました。

「東京十二題　品川沖お台場」非常にのどかですね、夏の作品かと思います。「東京十二題　駒形河岸」。これも巴水のコメントを述べさせて頂きます。「浅草駒形の河岸の竹家の前で真夏の午後にスケッチしたものです。竹と竹の

間が扇の半開きのようになってそこから大川（隅田川）を隔てて向こう側が見えます。道端に荷馬車の馬が立っている姿や車上に眠る馬方などいかにも夏らしい気持だと思いました。」巴水は雪景色や雨の景色の傑作が多くて夏の作品はいい作品が極めて少ないんですが、これも夏の作品の傑作のひとつだと思われます。

「五月雨降る山王」、日枝神社のことですね。それから「夜の新川」。これにつきましては、「版画の藍そのままの目もさめるばかりの澄んだ夏の夜空には星がひとつふたつ。どっしりとした蔵と蔵のあいだをてらすガスの日影。その当時、蔵というものに一種の興味をもっていたわたしはこの夜の新川を得たのであります。」と述べています。これはガスの光がテーマかなと思います。いかにも創作版画の方たちがやりたそうな抽象的な表現。新版画の特徴でざら刷り、ごまずりというんですけど、これが多用されておりまして、刷りの見本としてよく使われる作品です。傑作のひとつとして名高いと思います。

「東京十二ヶ月　芝公園の春雨」。東京十二ヶ月は関東大震災で六図作ったところで中断されてそのままになってしまった作品です。四角に丸の非常に変わった構図になっております。

「麻布二の橋の午後」、これも今、上に高速道路がかかって全く見る影もないところですが、非常に穏やかというか昔はよかったなと感じさせるような絵かなと思います。

「雪の向島」、昭和六年の作品ですが、あるお客様がこの作品がほしくて家にこられまして、タイトルが思い出せないんですね、雪の絵で鬼平犯科帳のラストシーンのようなやつだよと、あっこれのことかなと思いまして、すぐわかりました。そういうイメージをもつ作品なのかなと思います。

これは写真なんですが、昭和二二年に巴水と深水の展覧会をいたしました。その時に高松宮殿下が御来場になり伊東深水がご説明をしているところです。こちらを向いてるのは、川瀬巴水、渡辺庄三郎です。ここに先ほどご覧頂いた「対鏡」という作品が出ておりますね。伊東深水の第一作の作品です。この作品は「旅みやげ第二集　金沢本多町」という作品です。夏の作品に傑作がないって言うんですが、これはやはり数少ない夏の作品の傑作のひとつです。「今の私に何が好きだと聞かれましたら、即座に旅行と答えます。実際旅行は私の嗜好第一位にあります。版画をはじめましてからまだわずかの間ですがその間数回の旅行をいたしました。ただ嗜好と言うのみでなくいずれも写生が目的でしたが、その時の心持で面白かるべきところが案外つまらなく感じられたり、あるいはよい場所と思いながらも構

図がまとまらなかったりして、案外制作ができなかった場合もありました。ただしそのつど有形無形に得るところが決して僅少ではなかったのです。ここにあげましたのは皆、その写生旅行によって制作したものです。旅みやげとはその意味でつけました。そして同じ大きさの十六図をそろえて第一集とし、なお引き続いて第二集の制作に取り掛かります。」このシリーズのいちばん最初にこのように書いております。

「旅みやげ第二集　金沢本多町」金沢っていうのは暑いんですね。行った先で思いの外暑くて、その辺がこの雲だとか地面のところのざら刷りと言うところによく出てるかなと思います。雪ではありませんけれども傘をさした女性が出ておりますね。次に「旅みやげ第二集　小千谷旭橋」、新潟県の小千谷です。これを見ますと広重の「木曾街道の洗馬」とか、「長久保」と言ったところに何となく似てるのですが、巴水は自分の作品をつくるときできるだけ浮世絵は見ないようにするといっているのですけど、その言葉の裏返しでですね、浮世絵の印象をどうしても引きずってるんですね。渡辺庄三郎が嫌というほど浮世絵を見せたと思うんです。これもどうだ、あれもどうだ参考にしてみろといってしつこく見せて、もうわかったっていうのに見せるものだから頭にこびりついて、実際作品を作るとどうしても引っ張られる。だからなるべく見ないようにしてると言っているのではないかと思います。

浮世絵と違って新版画には変わり刷りというのがあります。これは「伊豆堂ヶ島（昼）」という作品ですが同じ版で色を変えるとこういう感じになります。昼と夜、夕方ですね。これは「伊豆堂ヶ島」という作品ですが、またちょっと話がそれますが、この作品を見てますとどうしても渡辺淳一という作家の『失楽園』という心中ものの映画を思い出しますね。役所広司と黒木瞳が出ておりました。心中する前に旅行に行くんですが、行って温泉に入るとそこからこれが見えるんですね。渡辺淳一の『失楽園』の主人公も章一郎というんです。それから『愛の流刑地』という日経新聞に出ていた小説があり、映画では寺島しのぶが主役でしたが、あの時の主人公も章一郎というんですね。渡辺淳一さんの本名は実は渡辺章一郎っておっしゃるんじゃないかなって常々思っております。調べられないのが残念ですが。

これは「西伊豆木負」、ひとつ間違うと本当に絵葉書的な写真ですが、実際私はこれを絵葉書にしました。私ども展覧会のたびに巴水の絵葉書を作ってきました。四八種類になっておりますが、売上のベスト五になっております。もちろん上から数えますと「馬込の月と芝増上寺」、これ

はなんといっても売れます。それから「日本橋」も売れます。その次がこの作品ですが、外国人の方がよく買っていくのが特徴です。やはり日本と言うとこの桜と富士。どうしてもやっぱりそれからは逃れられないのかな。展示即売会でこの作品の初刷りを出しますと、いの一番に売れますね。やはり人気がある、外国だけでなく日本でも人気がある作品のひとつです。

「東京十二題　大根河岸」という作品です。渡辺版画店は関東大震災になるまではこの大根河岸のすぐ裏手、京橋五郎兵衛町というところにありました。その後今の銀座八丁目に移りましたが、川瀬巴水はこの五郎兵衛町にあった時代の渡辺版画店にしょっちゅう来てまして、その当時築地に移転する前の青物市場がこの大根河岸でございました。京橋と銀座の境に流れていた運河でございます。それを関東大震災後に「東京二十景　大根河岸の朝」としてこれをもう一回描いてるんです。先程はものすごい賑わっていた大根河岸ですが、わずか数年の後に市場は移転してしまい渡辺版画店もいなくなってしまって、たまたま通りかかったらこんな寂れて何もなくなってしまったと。少し離れた京橋には人や車が賑わっているのに、この大根河岸のところには、まるで廃墟のように何もなくなってしまった。その寂しさを描いた作品なのかなと思います。この大きく描いた何も乗ってない船が非常にそれを象徴しているように思われます。

巴水は昭和五年に大田区の馬込と言うところに移っておりまして、その後亡くなるまで大田区にいたわけですが、東京都大田区の作品がとても多いです。これも「東京二十景　千束池」という作品ですね。今はあまり雪が降らないんですが、当時は相当降ったようで雪景色の作品が多い。これからも地球温暖化がよくわかると思いますね。神霊矢口渡で有名な、多摩川を描いた作品です。私、大学時代野球の同好会におりましてここでしょっちゅう野球をしておりましたので馴染みがあるんですが、昔はこんなとこだったのかなと僅か八〇年前ですけど本当に田舎ですね。

これが「池上市の倉（夕陽）」という作品です。「明石町の雨後」。先日、江戸東京博物館で巴水の展覧会がありましてその時にこの原画がありました。この原画はどさくさに紛れて渡辺版画店にあったものがどこかへ盗まれましてそれが回りまわって江戸東京博物館に収まっておりました。結果的には一番良い所に収まったなと思ってるんですけど、原画には女性の姿があるんです、着物を着た女性。この犬がこっちの左端にいたんです。ところが原画から版画になる時に女性は削られてしまって犬をこっちへ持ってきて、犬が主人公になってしまったのです。この向い側に

見えておりますのは月島でございますが、月島は当時工業地帯で何にも描くようなところではないんですが、非常にロマンチックに描かれています。ちょうど聖路加ガーデンの所から対岸に月島リバーハウスと言うのがあって、私が住んでるんですけどそのあたりを描いてる。今、朝の連続テレビ小説で有名な月島を描いております。

これが「東京二十景　大森海岸」です。最初に出た時に目録にDrizzling Night at Ohmori Seasideという英文が書いてありました。でも絵には雨が降ってないんです。最初たぶん作ったときには雨を降らせたんだと思います。そうすると真っ暗になってしまって面白くないので雨をやめたんですね。雨をやめてこの光を水にあてたところ、いい作品になったんで、やれやれと思ってたんですが、後で思うとなぜ夕方にもかかわらず日傘をさした女性がいるのかなと。雨降ってたから傘さしてたんですけど、雨をやめても傘すぼめるわけにいかなかったというんです。

巴水は昭和二一年に疎開していた塩原から戻ってきて洗足池の前に住むようになりました。洗足池の作品が非常に多く残っております。ここに千束八幡神社というのがありまして、ここの宮司さんも私のお客さまでございます。巴水の大ファンでございまして、絵を持っていく時電話をすると奥様が出ると間違えましたって切るんですが、本人が出た時だけ絵が手に入りましたからお持ちいたします。今日は家内がいるから来ないでくれ、明日何時だといないからその時間に来てくれって。奥さんに見つかると怒られるって言うんですね。また絵を買ったんですかと言って。そういうお客様もいるところです。

「上州法師温泉」といって今でもあります。長寿館という温泉旅館がございまして、二〇年くらい前に高峰秀子と上原謙が大変有名な国鉄のポスターになったところです。それを巴水が昭和八年に描いた作品です。普通は温泉を描くときに定番として女性を描きたがるものなんです。普通は。ところがここに自画像を描いております。これ本人の姿です。余計な話なんですけど先日オーストラリアのお客さまがうちにお見えになって、この旅館に行ったという方がいたんです。日本は有名なホテルはみんなあるチェーン店になってるというんです。ライオケイン・チェーンっていう有名なチェーン店があるじゃないかって。宿のことをライオケインっていうんですね。ライオケイン・チェーンだと思ってるんですね。別府へ行ってもここに行ってもみんなライオケイン・チェーンだっていって。それは違うリョカンと言うんだってご説明させていただきました。日本を誤解しないでくれと。

巴水に関するエピソードを少々申し上げます。伊東深水

と川瀬巴水。家業を妹夫婦に譲り画家を本格的に志し、鏑木清方に入門した川瀬巴水はすでに二〇代後半となっていました。門下生には年下ではあったものの優れた技能を発揮していた伊東深水がおりました。巴水は深水の「近江八景」に感動して渡辺版画店の門をたたき以後四〇年に及ぶ版画家としての人生が始まりました。巴水と深水は大変仲がよく、巴水は年下でも才能のある深水を尊敬し、深水は事あるたびに巴水を引き立てようと努力したと伝えられています。深水の娘、朝丘雪路さんから聞いた話ですが、巴水はしばしば深水の家を訪ね、時には幼少の雪路とその弟を外へ遊びに連れ出し、共に遊んであげていたといいます。全く飲まない深水とは対照的に酒が大好きな巴水のことを、「父と違っていつもお酒の匂いがしてゆでダコみたいに赤い顔をしていたので、タコのおじちゃんなんて呼んで弟と一緒にまとわりついては甘えていました。当時は知らなかったけど、風景版画の大先生にむかって私、大変失礼でした。」と雪路さんは話していました。

深水と巴水

これは昭和二八年ころの伊東深水と巴水の写真です。「東京十二ヶ月　三十間堀の暮雪」。巴水と庄三郎がともに銀座を歩いていた雪の降る夕方、三十間堀に差し掛かった時突然、巴水はスケッチを始めました。一心不乱に描き続ける巴水の姿を見て庄三郎は黙って筆をおさめるまで巴水に傘をさしかけていたといいます。まるで歌舞伎の一場面のような逸話ですがこうして初期の傑作「東京十二ヶ月三十間堀の暮雪」は誕生しました。

ちなみに巴水が描いた東京銀座は、この作品と歌舞伎座だけしかありません。もう少し描いていてくれたら本当にありがたいと思うんですが、意外としょっちゅう来ている銀座と言うのは、流行の最先端をいっていた街ですから巴水の描きたくなかったところなんではないかと思います。だけどもっと描いてほしかったというのは私の気持ちです。

「東京二十景　馬込の月」。先ほど以来、何度も登場しております。多くの巴水関係の書物、印刷物にもっとも多く取り上げられているのが、この馬込の月です。昭和五年に巴水は馬込に居を構えました。後年振り返って、巴水はこの馬込時代が最も楽しかったと述べています。あるとき近くを通る鉄道を電化してほしいという運動が地元で起こり、この松が鉄道の煤煙で枯れそうだからと鉄道会社に陳

情したいといって地元の方がこの作品を借りていきました。その時のお礼にトマトをもらったんだと言っております。この松も今はなく、バス停に三本松という名残をとどめるにすぎませんが、三本松の停留所がある環状七号線の上をまたぐ橋の袂に、ブロンズの板でこの作品が埋め込まれています。また馬込商店街に神社がありまして、そのお神輿にもこの絵が描かれています。今日でも地元の人たちのこの作品に対する愛着を感じさせます。

「東京二十景　芝増上寺」。これも先程来、何回も出ています。巴水は現在の新橋五丁目に生まれました。芝増上寺とは目と鼻の先。幼少の頃より慣れ親しんでいた場所でした。芝増上寺の門前でもある芝神明前は江戸時代から浮世絵の版元が多く存在していたところで、今日でも新橋五丁目にかけては山と渓谷社、モーターマガジン社、ゴルフダイジェスト社に名残があるように、明治時代にも絵草紙屋がまだ多く存在していました。巴水はこうした絵草紙屋を見るともなく浮世絵に親しんでいたのでしょうか。芝増上寺は東京の風景の中で何度も登場いたしますが、いずれも劣らぬ優れた作品に仕上げられています。関東大震災の時に大規模な火災から身を守るため巴水は家族とともに芝増上寺の境内に避難していたといいます。この「東京二十景芝増上寺」は震災直後の巴水の代表作です。渡辺版画店のみならず他の版元から出された巴水、あるいは他の新版画作品の多くは雪と赤い神社や仏閣の建物に傘をさす着物美人、これをモチーフとしているものが多いです。特にこの作品は海賊版の作品が出回るほど人気が高かった作品です。

「岡山の鐘撞堂」。巴水は旅が大好きで人生の多くの時間を旅行で過ごしています。巴水の大ファン、スポンサーは日本全国におりました。旅の途中に巴水は必ず彼らを訪ねていました。東京から持っていった版画作品や滞在中に描いた水彩画を買ってもらったりして旅行の費用にあてたといいます。巴水の弟子に岡山出身の村川源之助という方がいました。岡山に帰っていたようですが、巴水は中国地方を旅すると必ず彼を訪ねていたようです。村川氏に紹介してもらい地元の建築関係の大物を訪問したという記載が日記にもみられます。また度々展示即売会をしており、この村川氏の尽力があったのではないでしょうか。

数年前に私が岡山で展示即売会をいたしました所、地元の古老から昭和二五年にこの鐘撞堂はすでになかったといわれて調べましたところ、確かに戦前には市内にあったこの鐘撞堂は第二次大戦の爆撃で焼失しておりました。戦前にスケッチをしていた巴水は戦後、岡山を訪ねたとき、鐘撞堂の消失を知り残念に思っていたところ、先ほどの展示即売会の話が持ち上がり、目玉商品として昭和二五年にこ

の作品が誕生したようです。この鐘撞堂というのは岡山市民のランドマークとして大変親しまれていたようで、再建はされていないという話だったのですが、昨年の暮に私、岡山の丸善で展示会をいたしましたときに、ある方から岡山駅前のデジタルミュージアムに再建されているということを聞き、早速見に行ってまいりました。そうしましたらまず、その当時の写真が残っておりまして、こういう形が岡山の鐘撞堂として提示されておりまして、そのデジタルミュージアムに入ると一番いいところに五分の一の縮尺で復元されておりました。この復元された建物も、もともと二階建のものに無理やり三階建のところをつけたようでちょっとバランスが悪いんです。写真を見てもちょっとバランスが悪いのがわかるんですが、巴水のこの作品の方が落ち着きがあって、設計上はちょっと現物と違うんですが、絵となったこの巴水の作品の方がよっぽどおさまりがいいです。デジタルミュージアムになぜ巴水の作品を展示しないのかと文句を言おうかなと思ったんですけど、話が長くなるのでやめて何も言わず帰ってきてしまって、ちょっと後悔しております。

「水戸涸沼広浦」。また茨城県の水戸にもスポンサーがおり度々水戸を訪ねております。水戸に滞在中、巴水は深夜強盗にあい、旅行費用が入った財布を奪われました。気の毒に思った主人から巴水は金をもらってしばらく旅行を続けていたところ強盗が逮捕されて盗まれた金が全額戻ってきたそうです。巴水は一生冗談のネタにしていたようで、「私は強盗に押しいられて儲かった」と生涯とぼけていたようです。

最後になりますが絶筆「平泉金色堂」。昭和三二年五月に線描きを始め、襲いかかる病魔と闘いながら、はかどらない筆ももどかしく何度も何度も推考を重ね、巴水は十一月二七日冥界へと旅立っていきました。絶筆となった平泉金色堂は百ヶ日の法要の時に親族関係者のみだけに配られました。風景画家の最後の作品にふさわしく、静寂の中雪景色に溶け込むように消え去ろうとしている修行僧の姿は、画業に精進し、ついに旅立っていった巴水自身と重なり合います。こう思うのは私だけでしょうか。画業のフィナーレを飾るにふさわしい晩年の傑作中の傑作でございます。

昨年の十二月一八日、「開運なんでも鑑定団」にこの作品が現れました。持っていたのは巴水が通っていた床屋さんでした。当然、巴水は晩年その床屋さんに、ご存じのようにそんなに髪がある方じゃないんですが、通っていていろんな世間話をしていたようです。それで渡辺版画店で新作ができると時々持っていっては、その床屋さんにあげていたようでございまして、亡くなった時にお香典を持って

ご自宅にお参りに行ったと。そうしたら百ヶ日の法要の時に、お礼の挨拶文とともにこれが配られたそうでございます。正真正銘の初刷りでございまして、これは売ったものではありませんから持ってる方はみな、巴水と親しかった方でございますので滅多なことでは手放さないわけです。この作品が市場に出るということは非常に珍しいんです。私、今まで二十数年この商売しておりますが、この作品が売りにでたのは三回くらいしか見たことがないです。その作品が十二月一八日に放映されまして、今に至るも非常に多くの問い合わせが来ておりまして、私一月、二月は寝る間もないほど忙しかったのを覚えております。朝、コンピュータをあけてメールを見たら何かウイルスが入ったのかなと思うくらい、一六〇通のメールが来ておりまして驚きました。普段一〇通くらいしかメールが来ないんですよ。ほとんど来ないんですが、その応対をするだけで一週間かかりました。それくらいテレビの影響っていうのはすごいんですが、中でも、紳助さんが「わしも欲しいわ」と、この一言がきいたんですねきっと。余計なこと言って失礼しました。時間をだいぶ超過してしまいましたが、講演会っていうか、つまらない漫談のようになってしまいましたが、どうもご清聴ありがとうございました。